

名前の文字について

松井淑子

私の名前は松井淑子^{よしこ}である。どういう文字を書くのかと尋ねられたときは、こう答えることにしている。

「松の木の松に井戸の井、淑^{しゆ}女の淑^{じよ}に子供の子、です」

ついでに、こうも付け加えることにしている。

「淑の字は、私の場合、ッよし」と読みます」

というのは、淑の字は、ッとしと読まれるほうが多いらしく、そう断らないと、私の名は、私の知らないところで、ほとんどッとしこさん^ッになっているからである。

淑の字は読み方だけでなく、書くのも厄介らしい。

先日、知人仲間で会合をするにあたり、出席者名簿をつくったときのことである。知人の一人が気を利用して私の名前も書いておいてくれた。

「出席すると言っていたから、あなたの名前も書いておいたわよ」

「ありがとう」

そんな遣り取りがあつて、あとでたまたまその名簿を見たところ、私の名前の淑の字が間違っていた。

淑の字の書き間違いはよくあることなので別に驚かないが、間違いの仕方にもいろいろな種類があつて、それを見ると、書き手の思い込みがわかりなかなかに面白い。

淑の字の偏^{へん}のさんずい^{さんずい}は誰も間違わない。問題は旁^{つくり}の叔^{しゆく}のほうである。ッ上^{ッ上}の下のッ小^{ッ小}の字をッ少^{ッ少}と書く。この間違いがもっとも多い。こう書く人の頭の中には、字形ではなくてッしゅう^{ッしゅう}という音だけがあるのだろう。

つぎはッ上^{ッ上}の字をッ止^{ッ止}と書く。これは最初の覚え間違いをそのまま引きずっているだけかもしれない。

三番目に、これはごく少ないが、たまにッ上^{ッ上}の下のッ小^{ッ小}をッ下^{ッ下}と書き間違える人がいる。この人の頭にはッ上下^{ッ上下}という熟語が抜き難くあるに違いない。

人の頭とはおかしなもので、一旦間違つた文字なり言葉なりを覚えこんでしまうと、その後になんかに正しい文字や言葉に接してもなかなか訂正されないところがあるようである。そうした経験は私自身にもたくさんある。

先日、知人が書き間違えた淑の字は、ッ小^{ッ小}をッ少^{ッ少}としたケースであつた。私が、

「淑の字が間違っていたわよ」と言う、知人は、

「あら、ご免なさい。それにしてもあなたは、こんなに難しい名前の文字を、子供のころからよく間違えずに書いてきたものね」と宣のたまわった。

ベッド生活

小野澤繁雄

このあいだ、といつても昨年のことだが、中の子がつきあっているという女性がわが家を訪ねてくれた。子といっしょにである。いろいろ手土産で気を遣わせてしまったが、こちらの緊張もある。話の中で、ベッドですかそれとも床に布団をしていますかと聞いたところ、ベッドだという。

近所に住む妹の子、姪っ子は親がベッドのところ、床にしているという。

子どもたちが小さい頃は二段ベッドで、そのあと一段ずつにして、それぞれじぶんたちの部屋に置いて使っていた期間がある。

なんでこんな話かという、一昨年高齢の母親が兄の家で亡くなって、使っていたベッドが余っている、使わないかと云われたことがある。向うは全員すでにベッドで、処分するしかないところ、という。

こちらは一つある畳のへやにそれもこのところ敷きっぱなしにしていたので、これは、伸びをするにもいいし、疲れるとちょっと寝そべて本を読むなどができていた。それで、いろいろ迷うことをした。

しかしながら、これからは施設に入るかもしれないし、入院だつてあるかもしれない。ベッドには慣れておかなければならない、という声もじぶんのなかに聞く。

これまで出張で、ベッドになることもあった。どの程度ベッドメイクを外して、身を入れたらいいのか、きゅうくつに休んだ記憶もある。それに枕が高く大きかった。

マットレスはすでに処分済みで、残りのいわゆる簀の子ベッドをとどけてくれた。組み立て式な